

# 『希望』復刻にいたるまで

越水治

文化総合雑誌『エスポワール』の存在を知ったのは、今から五年前のことです。二〇〇七年一月、富山大学で開催された日本社会文学会 秋季富山大会の懇親会の会場で、たまたま横に座られたのが高良留美子さんでした。高良さんはH氏賞受賞の詩人であり、本大会の国際シンポジウムでは「真杉静枝と台湾経験」を発表された研究者であり、現在でも多方面で発言活動をされている思想家です。そして宴席上、花田清輝への傾倒や戦後の文化運動の核心を述べられて、出版という観点では『綜合文化』や『エスポワール』は十分復刻する価値がありますよとお声がけくださいました。『綜合文化』は名の知れた雑誌であり、お会いした翌年に当時勤務していた不二出版から復刻いたしました。

さて『エスポワール』、高良さんも当時編集にかかわっておられ、手持ちの原本を一冊ご送付いただきましたが、聞いたことも見たこともない雑誌でした。表紙が垢抜けしたきれいな雑誌だと思いましたが、『綜合文化』などの刊行準備に追われ、内容の精査を怠ったまま数年が過ぎていきました。しかし、心の奥の深いところで、その清新なタイトルとイメージはくすぶり続けていました。

そして昨年末、不二出版を退職し、新年を迎え、新会社を立ち上げようと決意したときに、「希望」が心の中から再び浮かび上がりました。それから、高良さんにいただいた通巻の二号を読みました。

その『エスポワール』には、純粋性・志の高さ、抵抗への意思がぎゅっしりと詰まっていました。また、編集兼発行者の河本英三氏の「希望」の目指し方と、戦鬪的ともとれる語り口が大きな魅力でした。さらに、福島原発事故がもたらした世界観と人間観の変容に照らして、自らが被曝者である河本氏の世界のとらえ方は、現在においてなお、重要な視点を提供すると考えました。

『希望』は後世にのこすべき資料だと思い、三人社の第一出版物といたしました。

以下出版にまつわる、いくつかの物語を記しておきます。

『希望』復刻版の正式依頼で、高良さんのご自宅近くの喫茶店で会談し、原本のご提供と解説のご執筆をお引き受けくださった際に、一九五二年当時の「エスポワール」文化運動の生の活動の様子をお聞きすることができました。今から六〇年前の話です。まるで昨日のことのように、夢を見るかのごとく語られた高良さんの回想は臨場感にあふれ、興味がつきず、その美しい表情も忘れがたいものになりました。

出版社には著作権取得作業が欠かせないのですが、本誌の主役である河本英三氏の話が不明でした。一九六〇年ごろに渡米を

したという情報まではわかっていたのですがその後については、高良さんも知らない、著作権台帳でも見当たらない。あきらめかけていたやさき、編集担当の白井かおりが小さな手がかりを見つけてきました。同姓同名かも知れないのですが、念のために連絡をいたしました。そして、その断片情報が、河本英三氏本人と確認できたのですが、河本氏は残念ながら二〇一〇年一月に他界。しかしニューヨーク在住の奥様とも連絡が取れ、渡米後の暮らしの一端をお伺いすることができました。詳細は解説に記されています。



最後に復刻版の構成について、当初『エスポワール』は東京で発刊された全一一号のみを対象とした企画でした。しかし広島で出ている全四号の前身誌『ESPOIR』が見つかり、

り、通読するうちに前身誌は別巻に収録という方針に変化します。それは、河本氏の志が広島時代からよどみなく流れていて、たった一つのことを叶えたいという連続性こそが、「希望」への道にまつすぐにつながっていると考えたからです。

河本氏の広島時代的一幕を知ることができたのは大阪大学の宇野田尚哉先生から、『広島文化サークル』という雑誌のコピーをいただいたことからでした。その雑誌をめくっていると、「エスポワール文化サークル」の紹介記事があり、広島版『ESPOIR』が刊行に至るとも詳しい経過が日時を追って記載されているに出会います。またその前身誌の回覧雑誌『青い實』が存在していたことも確認することもできました（雑誌は未見）。『われらの詩』の研究会に参加していなければ、別巻はまだ闇に眠っていたと思います。

余談になりますが、広島時代に『ESPOIR WEEKLY』なる雑誌が一四号でいることがわかり、コピーを入手することもできました。今後、広島時代のサークル活動についての研究の進展がとも楽しみみです。

以上長くなりましたが、本誌誕生の秘話を記してみました。すべては、人との出会いから始まり、それが網の目のように広がっていったものです。今後も、「戦後雑誌」の発掘と復刻を続けま。来春には『われらの詩』復刻版（解説 宇野田尚哉氏・川口隆行氏）を予定しています。ご期待ください！  
「三人社 代表」